

関係構造の派生と外在化について

赤羽 仁志

抄録

現行のミニマリスト・プログラムの枠組みに立脚し、日英語の関係構造の統語的派生と外在化について考察する。赤羽（2021）で意味解釈のみならず統語的派生においても英語の制限的關係構造には等位接続が関与しているとする分析が提案されたが、同分析に基づき日本語の主名詞外在関係構造と主名詞内在関係構造の何れの基本的特徴も統一的に捉えることができることを示す。それらの構造の外在化には Chomsky（2021）が提案する列形成を用いた説明を試みる。日本語と英語の関係構造の相違については、接辞付加に掛かる隣接条件と語彙項目に与えられる〔末尾〕素性が重要な役割を演じることを述べる。更に、日本語の主名詞内在関係構造と比較し得るような英語の構造についても言及する。

1. はじめに

言語類型論の研究において、Greenberg（1963）は形態論と語順に関する事実に基づき 45 個の含意的普遍性を提案した。(1)はそのうちの1つである。

(1) 普遍性 24

唯一的構造あるいは代替的構造として関係表現が名詞に先行するならば、その言語は後置詞の言語か、形容詞が名詞に先行する言語か、あるいはその両方である。(ibid.: 71)

この普遍性 24 については日本語の以下のような事実によって確認することができる。

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| (2) a. [学者が 送った] <u>本</u> | (3) a. 宅配便 <u>で</u> |
| b. * <u>本</u> [学者が 送った] | b. * <u>で</u> 宅配便 |
| | (4) a. [古い] <u>本</u> |
| | b. * <u>本</u> [古い] |

(2a) に見るように日本語では関係節 ([学者が 送った]) が主名詞 (本) に先行するが、そのような日本語においては (3a) に示されるように後置詞 (~で) が用いられ、更には、(4a) のように形容詞 ([古い]) が名詞 (本) に先行する。Greenberg はまた別の普遍性として次のようなものも提案している。

(5) 普遍性 4

偶然を圧倒的に上回る頻度で、標準的 SOV 語順を取る言語は後置詞の言語である。(ibid.: 62)

普遍性 4 も日本語のような言語の特徴に符合する。しかしながら、これらの普遍性はあくまでも事実を記述しているに過ぎず、記述内容が妥当であるとしても、「関係節が主名詞に先行すること」と「後置詞を用いたり形容詞が名詞に先行したりすること」、また、「SOV 語順を取ること」と「後置詞を用いること」が、なぜ、結び付けられるのか、根本的な説明が欠如している。

本研究は対象言語を英語と日本語に絞り、そのような記述に対して理論的説明を与えようとする一つの試みである。具体的には、現行のミニマリスト・プログラムの枠組みにより、日英語の関係構造について、その統語的派生と外在化（線形化）に焦点を当てて考察を加える。本論文の構成は次の通りである。まず、2 節において筆者が赤羽（2021）で提案した英語の制限的關係構造の等位接続分析について概要を述べる。関係構造は等位構造を含むことから、その外在化には Chomsky（2021）が提案する列形成（FormSequence）が関与する。3 節では等位構造の外在化の問題について指摘し、日本語の関係構造の議論のための基礎を与える。そして、4 節は、日本語の主名詞外在関係構造について、その基本的特徴を等位接続分析によって捉えることができることを示す。日本語と英語の相違については接辞付加に掛かる隣接条件と主要部に与えられる [末尾] 素性が重要な役割を演じていることを述べる。5 節では日本語の主名詞内在関係構造の派生と線形化について論ずる。また、英語で主名詞内在関係構造と関係があると思われる構造にも触れながら等位接続分析の更なる可能性を探る。6 節は結論である。

2. 英語の制限的關係構造の等位接続分析

本節では、後の議論の基礎とするべく、赤羽（2021）における英語の制限的關係構造の等位接続分析について略述する。

まず、(6) のような制限的關係構造において名詞の限定修飾が関与するが、それを捉えるのに形式意味論では従来、(7) のように連言が用いられる。

(6) every girl that Mary saw

(7) $\forall x [\text{girl}(x) \wedge \text{Mary saw}(x)]$

(Alexiadou, et al. (2000: 5))

(7) では、Milsark（1977）の意味での強限定詞 every を排斥した内側のレベルにおいて \wedge (AND) による接続が行われ、主名詞句 girl と関係節 Mary saw が every の作用域に含まれることが示されている。これを赤羽（2021）は統語構造にも導入するが、前提とな

る名詞句の構造について、Chomsky (2007), Chomsky, et al. (2019) に従い、名詞化辞句 nP が限定詞句 DP を含む (8) のように仮定する。

(8) $[_{nP} n [_{DP} D [_{RP} \dots R \dots]]]$ (R は語根)

(8) の構造で、強限定詞は nP 極辺に具現する¹。それに対し、不定冠詞のような弱限定詞は DP 主要部、あるいは、DP 極辺に具現し D 素性を持つ要素とする。(6) で主名詞句 *girl* は強限定詞を排斥することから、抽象的な D を主要部とする投射、即ち DP であると考え。一方、制限関係節は主要部に現れる *that* が強限定詞 *that* と同形態であるが、強限定詞のような指示機能は持たないため、限定詞ではあるが弱限定詞の一種と見做す。制限関係節は D 素性を持つ補文化辞の投射となり、ラベルはやはり DP となる。

赤羽 (2021) は、制限関係節と主名詞句が音形を持たない等位接続詞 *Conj* の仲介により等位構造を成し、関係構造を作り出すとする。その派生過程を (9a-e) に示す²。

- (9) a. $[_{DP} \text{that}_D \text{Mary saw } [_{DP} \text{girl}]]$
 b. $[[_{DP} \text{girl}] [_{DP} \text{that}_D \text{Mary saw } t_{DP}]]$
 c. $[\text{Conj} [[_{DP} \text{girl}] [_{DP} \text{that}_D \text{Mary saw } t_{DP}]]]$
 d. $[_{DP} [_{DP} \text{girl}] [\text{Conj} [_{DP} t_{DP} [_{DP} \text{that}_D \text{Mary saw } t_{DP}]]]]$
 e. $[_{nP} \text{every } n [_{DP} [_{DP} \text{girl}] [\text{Conj} [_{DP} t_{DP} [_{DP} \text{that}_D \text{Mary saw } t_{DP}]]]]]]$
 (= (6))

(9d-e) に示すように、*Conj* は音形のある等位接続詞 *and* と同様、同一のラベル (ここでは DP) を持った 2 つの統辞体を接続する。(9) の派生で注目すべきは、*Conj* と最初に併合した関係節の内部から主名詞句が抜け出すことである。途中段階の (9b-c) において主名詞句が関係節と内部併合 (= 移動による併合) をし、一旦はその極辺に立ち寄る。ラベル付与のアルゴリズムの詳細については Chomsky (2013) を参照されたいが、その際に形成される $\{DP, DP\}$ のような統辞体には解釈に必要なラベルが付与できない。主名詞句が (9d) のように関係節の極辺から脱出して *Conj* の投射と更に併合することにより、問題であった $\{DP, DP\}$ は $\{t_{DP}, DP\}$ となり、ラベル付与は正常に行われることになる。

(9) の派生はいわゆる上昇分析を踏襲したものと見做せ、(10)-(11) に例示される束縛やイディオムに関しての再構成現象に容易に説明を与えることができる。

- (10) a. The portrait of himself_i that John_i painted is extremely flattering.
 b. *The portrait of John_i that he_i painted is extremely unflattering.
 (11) a. We made headway.
 b. The headway that we made was satisfactory.

(Schachter (1973: 31-32))

(10a, b) では内部併合適用の際、主名詞句 (portrait of himself_i/John_i) が関係節 (that John_i/he_i painted *t*) の中にコピー (*t*) を残しているため、そのコピーの内容を再構成することにより各例における束縛の可否を捉えることができる³。また、(11a) のイディオムを成す文に対し、(11b) はイディオムの線形順序を崩しており、一見、イディオム解釈が不可能と思われる。しかし、この場合も関係節 (that we made *t*) の中に主名詞句 headway のコピー (*t*) が残されているため、やはり再構成をすることによりイディオム解釈が導出できる。

Chomsky (2021) は、感覚運動系への転送時に等位構造に対して列形成という演算が適用され、当該構造の外在化に必要な線形化が施されることを提案している。Chomsky によれば、列形成には厳密適合条件が課されるが、Ross (1967) の等位構造制約は厳密適合条件の1つとなる。ここではそれを明確にするため、次のような条件として述べておく。

- (12) 等位構造から何らかの摘出が行われているとき、摘出された要素がその等位構造を構成する全ての等位項の中にコピーを持つならば、その場合に限り、その等位構造は列形成を受ける。

「等位構造」とは純粋な等位構造のことであり、等位項同士が時間的順序や因果等の非対称的意味関係になるような擬似等位構造でないものを指す。また、純粋な等位構造を作り出す接続詞は純粋な等位接続詞である。(12) により、等位構造制約違反の例は排除されることになる。

- (13) *Whose tax did [[the nurse polish her trombone] and [the plumber compute t_{wh}]]? (Ross (1967: 160))

(13) では、whose tax が [the plumber compute t_{wh}] にはコピー (t_{wh}) を持つのに対し、[the nurse polish her trombone] にはコピーを持たない。列形成を受けるために、純粋な等位構造からの摘出は必然的に全域的な (across-the-board) 適用となり、さもなければ外在化は不可能となる。関係構造にも等位構造が関与していることから、複名詞句制約の違反、より厳密には、名詞補文でなく関係節からの摘出を伴う「強い」複名詞句制約の違反がやはり (12) によって排除される。(14) がその例であるが、(14) において関係節を導く関係代名詞 who は (6) の that と同様に D 素性を持つ補文化辞と取り敢えず仮定しておく⁴。

- (14) *Who does Phineas know [[a girl] [who is jealous of t_{wh}]]? (ibid.: 124)

(14) で文頭に生起する疑問詞 who は、関係節 [who is jealous of t_{wh}] にはコピー (t_{wh}) を持つが、主名詞句 [a girl] にはコピーを持たないため、外在化が不可能となり非文となる ((14) に対応する日本語で複名詞句制約の違反が起こらないことについては 4.3 節

で触れる)。このように等位構造制約と複名詞句制約が外在化に掛かる条件に置き換えられるが、2つの制約の共通点が捉えられるのは関係構造の等位接続分析の利点にはかならない。

3. 外在化の問題

等位構造の外在化は列形成によるとしたが、そもそも等位構造に列形成が適用されるのはなぜだろうか。統語構造の外在化については、伝統的な用語を用いればC-統御関係に従い、C-統御する要素からC-統御される要素へという順序に線形化が行われると考えられる (cf. Kayne (1994))。統辞体は併合で作られ集合であるため、統辞体を構成する要素のうち外側の集合の要素から内側の集合の要素へ順に先頭から末尾へと配列されていくと言った方が正確であろう。これに対し、純粋な等位構造の場合、含まれる等位項同士は本来同等であり、接続詞の前後にそれぞれ配置されさえすればよいとすると、2つの等位項 A, B から成る等位構造であれば、“A and B” の線形順序を導くものも、“B and A” の線形順序を導くものも、同一の構造として見做し得る。そのように考えると、赤羽 (2021) では関係構造として (9e) のような構造が構築されるとしたが、Conj と [DP girl] が併合した後で [DP that_D Mary saw (girl)] が併合した (15) のような構造 ([DP girl] は不動のまま) も可能なはずである。

(9) e. [_{NP} every *n* [_{DP} [_{DP} girl] [Conj [_{DP} *t*_{DP} [_{DP} that_D Mary saw *t*_{DP}]]]]]]

(15) [_{NP} every *n* [_{DP} [_{DP} that_D Mary saw (girl)] [Conj [_{DP} girl]]]]]]

外在化において (15) がこのまま線形化されるとすれば、関係節 [_{DP} that_D Mary saw (girl)] が主名詞句 [_{DP} girl] に先行することになる。しかし、それは英語の関係構造の線形順序とはならない (ここでは線形順序のみを問題としている)。

(9e) の線形化が許され (15) の線形化が許されない理由を何に求めるべきであろうか。関係構造の線形化を決定する要因について、まず、(9e)/(15) の主名詞句と関係節を比較した場合、「重さ」あるいは構造的な複雑さの観点において前者よりも後者が優っていると判断されるかもしれない。より「重い」要素は線形上より後方に配置されるとするならば、英語の関係構造としては (15) でなく (9e) が選ばれる。しかし、そのように「重さ」を考慮することには問題があると思われる。例えば、2つの関係節が積み重なって関係構造が構成されている (16a, b) において、関係節の順序により解釈の違いが生ずることが Jackendoff (1977: 185) によって指摘されている。

(16) a. the men [who hated lox] [who came to dinner]

b. the men [who came to dinner] [who hated lox]

積み重なった関係節のうち、まず内側の関係節が主名詞句を限定する。換言すれば、内側

の関係節が主名詞句の一部になるのである。その上で外側の関係節が更なる限定を行うため、(16a) と (16b) は異なった解釈となる。(16a, b) のような例において、「重さ」の観点から内側の関係節を含んだ主名詞句と外側の関係節を比較した場合、前者よりも後者が優れているとすることはできない。したがって、(9e) が許され (15) が許されないことについて「重さ」は重要でないと思われる。

(9e) と (15) の構造は何れも nP であり、名詞化辞 n がその主要部となっている。他の範疇決定要素と同様、 n は語根と結合することにより後者を範疇化（この場合、名詞化）する。(9e) と (15) で、語根 *girl* は n によって名詞化される必要がある。それに対し、関係節を導く *that* は補文化辞として導入されているため、少なくともこの場合には名詞化される必要がない。範疇化には一種の接辞付加が関わっているとすると、接辞付加に掛かる一定条件が充たされることにより形態的な範疇化が行われることになる。接辞付加に掛かる条件として、Embick and Noyer (2001), Embick and Marantz (2008) は線形上の隣接を挙げている。そこで、 n が語根（を含んだ主要部複合体）*girl(+D)* と線形上、どのような位置関係になっているかに注目されたい。(9e) では n と *girl(+D)* の間に隣接の関係が成立しているため、 n による語根の名詞化が可能となる。一方、(15) では n と *girl(+D)* が隣接の関係にないため、名詞化が起こらない。このことから、英語の関係構造として (9e) の線形化は許され、(15) の線形化は許されないとすることができる。

関係構造の外在化に関しては n と主名詞の語根(+D) との間に接辞付加に掛かる隣接条件が働いており、また、関係構造を含めた等位構造への列形成の適用は線形順序を確定するためのものと考ええる。以上のことを仮定し、次節以降では日本語の関係構造の分析を試みる。なお、主要部を結合するのに従来、主要部移動が仮定されてきたが、Chomsky が指摘しているとおり、主要部移動は統語演算として認められる併合（内部併合および外部併合）とは異質であり、定式化もされ得ない。以下の議論では、名詞化にも主要部移動は関与しないと考える。

4. 日本語の主名詞外在関係構造

4.1. 統語的派生

英語の関係構造に対応する日本語の構造は、1 節で触れたように関係節が主名詞句に先行する (17) のようなものである。

(17) [学者が e 送った] 本 (= (2a))

英語と同様、関係節の外に主名詞句が現れるが、5 節で取り上げる主名詞内在関係構造に対して主名詞外在関係構造と呼ぶことにする。(17) では、関係節外の主名詞句に関係付けられる空所 e が関係節内に生じている。英語の場合には、2 節で見たように、主名詞

句が関係節から抽出され、関係節を包含する Conj の投射と併合し関係構造を形成するとした。そのような一種の上昇分析により (10)-(11) の再構成現象が説明されたのであったが、日本語についてはどうであろうか。もし日本語でも上昇分析が妥当であるならば、(18) のような例で主名詞句が関係節内の *e* の位置で再構成され、主名詞句に含まれる照応形「自分」が関係節内の主語「ジョン」に束縛される解釈が可能になると予測される。

(18) *[ジョン_iが *e* タイプした] 自分_i の論文 (Hasegawa (1988: 59))

しかし、(18) ではそのような解釈が不可能とされる。この判断によれば、*e* は再構成の対象となる内部併合のコピーでないことになり、Hoji (1985), Hasegawa (1988), Murasugi (2000) 等が主張するように空所からの上昇は支持されない。*e* がコピーでないとすると、それは空代名詞 *pro*、あるいは、音声的に省略された名詞句となる。*pro* 分析の問題として、音声的に空であっても代名詞であるため、*pro* は何からも束縛される必要がない。よって、それが主名詞句と同一指示となる保証は何もない。省略も基本的に適用が随意的であるとすれば、空所を含む関係節は言わば偶然の産物になる。

(18) については「自分」の束縛解釈が困難とされたが、話者によっては許容度に差が見られる。実際に、(18) と同じ構造の (19) では「自分」の束縛解釈の判断が改善する。

(19) [健_iが *e* 書いた] 自分_i の伝記が ベストセラーになった。(郡司 (2002: 212))

(19) の「自分」を更に別の照応形「お互い」に、「健」を「彼ら」に換えてみると束縛解釈はより鮮明になる⁵。

(20) [彼ら_iが *e* 書いた] お互い_i の伝記が ベストセラーになった。(作例は筆者)

Whitman (2013: 366) によれば、変項の束縛についても再構成の効果が見られる。

(21) a. [誰も_iが *e* 好き な] 自分_i の親戚は 遠くに住んでいる。

b. [*e* 誰も_i を 慰めた] 自分_i の親戚は 遠くに住んでいる。

(21a) で「自分」が普遍量化詞「誰も」に束縛された変項として解釈されるためには、主名詞句「自分の親戚」が関係節内の目的語位置 (*e*) に再構成されて主語位置の「誰も」に束縛される必要があるが、実際に変項解釈が可能である。これは (22) の英語の事実と比較できる。

(22) The relative of his_i that everybody_i likes lives far away.

(Sauerland (2000: 352))

(21b) では「自分」に束縛変項の解釈はないが、それは、この例で関係節内の空所が主語の位置にあり、再構成をしても階層構造上、目的語の「誰も」に「自分」が束縛されないためである。因みに、(21b) で「自分」の唯一可能な解釈は、その発話主体指向性から、話者を指す解釈である。

イディオムの再構成についても日本語の関係構造で観察が可能である。(23) では関係

構造に「～に盾を突く」というイディオムが含まれている。

- (23) [[一度、親に *e* 突いた] 盾] を すぐすと撤回するのもプライドが許さなかった。
(Whitman (2013: 368))

主名詞句「盾」を関係節外に置いたため、表面上、イディオムの語順を成していないが、それにも拘らず、イディオム解釈が成立している。この状況は (11b) と全く変わらない。このような事実から、再構成の前提となる主名詞句を関係節から抽出しその外に内部併合をする分析は支持を得る。Whitman (2013) ではそのような分析を裏付ける議論が更に為されているが、Whitman の議論をここで全て再現することはせず (二重関係化の議論については 4. 3 節で引用する)、日本語の主名詞外に関係構造においても英語と同様の関係構造が形成されていると考える。

2 節でも述べたように、制限的關係構造が意味的に連言で捉えられることが関係構造の等位接続分析を動機付ける。日本語や他の言語についても、関係構造を含め名詞修飾の構造を等位構造と関連付ける論考はあり、例えば、柴谷 (2021) を挙げることができる。柴谷は機能主義の立場に立っているため前提が異なるが、名詞を修飾する要素は「体言化」されて「体言類」、つまり、名詞的要素になる。体言類は事物の集合を表し、体言類同士が等位接続されることにより、(7) にも示された交差が作り出される。体言類が等位接続されるといふ見解は言うまでもなく (9) の派生に通じる。

日本語で関係節が名詞的要素になっていることは、古語についてはいわゆる連体形と終止形が (24a, b) のように区別されることから確認できる (柴谷 (2021: 462-463))⁶。

- (24) a. [*e* 流るる] 水
b. *[*e* 流る] 水

(24a) で関係節の動詞の連体形語尾「る」を、体言類を作り出す要素と見做せば、主名詞句と等位接続されて関係構造を形成できる。動詞が終止形を取る (24b) では、等位接続が許されず非文法的となる。中世に完成した連体形と終止形の合一の結果、現代語においては動詞が実際に連体形を取っているのか判別ができない。しかし、連体形と終止形が区別できる範疇はあり、形容詞ではやや文語的あるいは固定的ではあるが、判別可能な場合がある。

- (25) a. 良き ライバル (= 良い ライバル)
b. *ライバルが良き。(= ライバルが良い。)

いわゆる形容動詞でも区別があることは、柴谷 (2021: 550 注 2) も指摘している。

- (26) a. 奇麗な花
b. この花は きれいだ。

現代語の動詞についても、柴谷の言を借りれば、「この区別は潜在的に付けられている可

能性がある」⁷。とすると、関係節は名詞的要素としての特徴を備えており、主名詞句との等位接続が可能になっているとすることは理に適っていると思われる。柴谷は名詞修飾の構造について機能類型論的説明を与えることを中心的課題としているため、日本語の関係構造の詳細については明らかにしていない。しかしながら、日本語においても2つの名詞的要素（関係節と主名詞句）を組み合わせることによって関係構造が作られ、再構成の効果が示すように主名詞句が関係節から取り出されたものであるとすると、そのような構造は2節で見た等位接続分析に矛盾しない。

制限的關係構造に限った場合、固有名詞は一般に主名詞句にならないことから、主名詞句それ自身は特定の事物を指すのに関わる要素を含まない。(8)の nP 構造を仮定するとき、強限定詞を排斥し弱限定詞と語根Rを含むDPのレベルは指示機能とは切り離された名詞句の属性に関する部分であり、主名詞句は正にDPであると考えられる。

(8) [nP n [DP D [RP ... R ...]]]

他方、関係構造全体としての nP は特定の事物を指し得るため、指示機能を n に帰属させることは自然であろう。等位接続詞Conjは同一ラベルの統辞体同士を接続する。主名詞句がDPであることから接続される関係節はやはりDPのラベルを持つことになる。関係節には補文化辞Cの要素である「と」や「か」が現れないのも、関係節がCPでなくDPであることと整合する。Dは屈折辞句IP⁸を補部として併合するとしよう (cf. Murasugi (1991, 2000))。Dは連体形の語尾となり、このDが柴谷の言う「体言類」の特徴をもたらす。

関係節とDの関係については、(27)に見られるいわゆるガ・ノ交替も考慮に入れる必要がある。

(27) a. [[学者-が 送った] 本]

b. [[学者-の 送った] 本]

関係節では主語が主格「が」だけでなく属格「の」も取り得る。Miyagawa (1993) が主張するように属格はDによって付与されるとするならば、関係節がDを含むとする分析は支持される。なお、Miyagawaの分析では属格付与のためにLFでの不可視移動が提案されているが、現行の枠組みにおいてはLFおよびその他の表示レベルは破棄されており⁹、転送適用後のLF移動は維持されない。属格の付与を、ここでは移動を伴わずにDとの一致によって行われるものとする。(9)の英語の関係節では、CP主要部がD素性を持つことから関係節のラベルがDPになるとしていたが、その分析を採用したとしても得られる構造は基本的に変わらない。(27a)のように関係節の主語が主格を付与されることも考え合わせれば、CでありながらD素性を持つことにより主格と属格の何れにも対応が可能になるのではないかと思われる (Cが属格付与に関わるという議論について

は Hiraiwa (2001) 等参照)。日本語の C が D 素性を持ち且つ [Q] 素性を持たないとき C は連体形の語尾として具現し「と」や「か」は現れないとすれば¹⁰、関係節が C の投射でありながら D 素性を持つため DP のラベルを持つという分析を日本語でも採用できる。

以上から、日本語の主名詞外在関係構造について (28) のような派生を提案する。なお、格の具現は統語派生の段階では起こらないが、提示の便宜上、関係化されていない *nP* に格形態 (「が」) を付している。

- (28) a. $[_{DP} C_D [_{IP} \text{ 学者が } [_{DP} \text{ 本 }] \text{ 送った }]]$
 b. $[[_{DP} \text{ 本 }] [_{DP} C_D [_{IP} \text{ 学者が } t_{DP} \text{ 送った }]]]$
 c. $[\text{ Conj } [[_{DP} \text{ 本 }] [_{DP} C_D [_{IP} \text{ 学者が } t_{DP} \text{ 送った }]]]]$
 d. $[_{DP} [_{DP} \text{ 本 }] [\text{ Conj } [_{DP} t_{DP} [_{DP} C_D [_{IP} \text{ 学者が } t_{DP} \text{ 送った }]]]]]]$
 e. $[_{nP} n [_{DP} [_{DP} \text{ 本 }] [\text{ Conj } [_{DP} t_{DP} [_{DP} C_D [_{IP} \text{ 学者が } t_{DP} \text{ 送った }]]]]]]$

(28) は (9) に示した英語の制限的關係構造の派生過程と基本的に異ならない。関係節の目的語の位置に生じている空所 t_{DP} は $[_{DP} \text{ 本 }]$ が内部併合を受けた際にできたコピーである。このコピーは随意的に再構成され、上で見た (19)-(21a) および (23) がその適用例になる。

4. 2. 外在化

日本語の關係構造の線形順序についても、原則的に C-統御する要素から C-統御される要素へ、先頭から末尾へと線形化がされていくとしよう。しかし、(28) の派生過程の最終段階 e. からは日本語の線形順序が導かれないうように思われる。この問題に関し、等位構造に列形成が適用される意義をここで確認しておきたい。

3 節でも述べたように、等位構造に含まれる等位項同士は本来同等であり、2 つの等位項 A, B から構成される構造は、“A and B” / 「A 且つ B」の線形順序を導くものとも “B and A” / 「B 且つ A」の線形順序を導くものとも解釈される。2 つの等位項は接続詞の前後にそれぞれ配置されさえすればよいとすると、外在化の際、何によって等位項間の線形順序が決められるのか。上ではそれが形態論的要因であるとした。つまり、語根 (を含んだ主要部複合体) が名詞化辞 *n* と結合される必要があり、それには線形上の隣接条件を充たすことが要求される。(28e) では問題となる隣接条件が充たされているように見えるが、これでは英語のような線形順序となってしまうため、(28e) がそのまま外在化されることが何らかの理由で妨げられなければならない。

言語間に見られる線形順序の相違について、従来の議論においては媒介変数により体系的に捕捉することが試みられてきた。その役割は現行のミニマリスト・プログラムでも変

わっていないと言えるが、作用するのが統語派生の中核的な場面ではなく周辺の外在化の場面であることが強調される (Chomsky, et al. (2019: 233), Chomsky (2020: 19) 等参照)。媒介変数で最も基本的なものの1つとして主要部先頭・末尾媒介変数があるが、それについて、次のように仮定することにする。

(29) 語彙項目に形態素性 [末尾] を付与 {する/しない}。ただし、純粋な等位接続詞 Conj は [末尾] 付与の対象に含まれない。

[末尾] が + / - の値を持つ二価的素性ではなく一価的な素性であるとする、その意味において [末尾] 付与を選択していない言語は無標の言語と言える。無標の言語では主要部が末尾に配置されず、Kayne (1994) が主張したように単純に C- 統御階層の順に線形順序が与えられるため、結果として主要部先頭言語となる。[末尾] 付与を選択した言語は有標であり、外在化の際、句の主要部が一律に句の末尾に配置されるが、その他の要素の線形順序は基本的に C- 統御階層によると考える。[末尾] 付与に関して有標であるか否かに拘わらず、純粋な等位接続詞は同素性付与の対象に含まれないとするため、等位構造中、Conj が何れの等位項に先行するのか、あるいは、後続するのかは、それ自身では決まらない。そこで、列形成が適用されるとき (30) のような線形化が行われるとしよう。

(30) Conj は等位項の中間に配置される。

さて、日本語では [末尾] 付与が選択されるが、それを (30) と共に (28e) に適用すると (31) になるだろうか。

(31) [_{NP} [_{DP} [_{DP} 本]] [Conj [_{DP} [_{IP} 学者が *t*_{DP} 送った] C_{D[末尾]}]]] *n*_[末尾]

(31) では線形上、*n* が関係節とは隣接しているが、語根 (を含んだ主要部複合体) 「本 (+D)」とは隣接していない。語根は必ず範疇決定要素と結合しなければならず、そのためには接辞付加に掛かる隣接条件を充たさなければならない。よって、(31) は適格な外在化に繋がらない。隣接条件を充たすには、(31) のように Conj に主名詞句が先行し関係節が後続するのではなく、むしろ、(32) のように Conj に関係節が先行し主名詞句が後続しなければならない。

(32) [_{NP} [_{DP} [[_{DP} [_{IP} 学者が *t*_{DP} 送った] C_{D[末尾]}]] Conj]] [_{DP} 本]] *n*_[末尾]

列形成適用の際、Conj は等位項の中間に配置されるとしたことから、何れの等位項がそれに先行するのか、あるいは、後続するのかは本来自由である。しかし、関係構造については、主要部を句の末尾に配置する [末尾] の付与と接辞付加に掛かる隣接条件によってそれがどちらになるかが決定されるのである。

1 節で、Greenberg の普遍性 4 と普遍性 24 は日本語のような言語の事実を単に記述しているに過ぎないことを指摘した。SOV 語順を取ることと後置詞を用いること、関係節

が主名詞に先行することと後置詞を用いる・形容詞が名詞に先行することが、どう結び付けられるのかの説明が必要であった。V と後置詞がそれぞれ [末尾] が付与された主要部 *v* (動詞化辞) と *p* (側置詞化辞) を指しており、また、日本語の限定用法の形容詞が Baker (2003) が主張しているように一種の関係節であるとする、Greenberg の普遍性 4 と普遍性 24 は本節の議論から可能な理論的説明が与えられると思われる^{11,12}。

4.3. 複名詞句制約の違反？

日本語の主名詞外在関係構造も等位構造を取っているとすると、関係節から摘出が行われたとき、2節で述べたように (12) が適用されることになる。

(12) 等位構造から何らかの摘出が行われているとき、摘出された要素がその等位構造を構成する全ての等位項の中にコピーを持つならば、その場合に限り、その等位構造は列形成を受ける。

(12) を充たさない場合、(14) で見た英語の強い複名詞句制約の違反の例のように排除されることになるが、日本語の関係構造についても確認しておく。

井上 (1976) は次のような例を挙げながら、複名詞句に含まれた関係節からの二重関係化は (後に挙げるような例外を除き) 概ね不可能であることを述べている。

(33) *その学者が送った書店が焼けた本 (ibid.: 179)

(33) の構造を (34) に示す。

(34) [[[その学者が t_i 送った] 書店]_i] が焼けた] 本_j

(34) では、下線を付けた内側の関係構造中の t_j の位置から「本」を取り出して外側に更に別の関係構造を作っている。関係構造が等位構造を含んでいるとすると、関係節は等位項であり、片方の等位項 ((34) で下線を付けた関係構造中の関係節) だけから DP (「本」) の摘出が行われれば、それは (12) に抵触する。よって、複名詞句制約違反の (33) の非文法性が捉えられ、また、日本語の主名詞外在関係構造が等位構造を含んでいることの裏付けになる。

これに対し、二重関係化には例外的に可能な場合があることが Kuno (1973) 以来よく知られている。(35) がその例である。

(35) [[可愛がっていた] 犬が死んでしまった] 子供 (ibid.: 239)

(35) も (34) と同様の構造をしているのだとすれば、(12) にやはり抵触することになり非文法性が生ずると予測される。しかし、実際には (35) は文法的である。これについて Whitman (2013: 370) は、日本語のいわゆる大主語が関係化の対象になるとする Sakai (1994) の主張を取り上げながら、(35) の「子供」が内側の関係節の要素ではなく、むしろ、(36) のような文の大主語に由来しているとする。

(36) その子供_iが [[pro_i 可愛がっていた] 犬] が 死んでしまった。

Whitman はまた、大主語が通常の主語と同じ特徴を持つとする Shibatani (1978) に言及しつつ、大主語も「自分」の先行詞になるとし、(36) の pro を「自分」に置き換えた (37) で「自分」が大主語によって束縛されていることを指摘する。

(37) その子供_iが [[自分_i が 可愛がっていた] 犬] が 死んでしまった。

(Whitman (2013: 370))

(37) の大主語を関係化すれば (38) となる。

(38) [e_i [自分_i が 可愛がっていた 犬] が 死んでしまった] 子供 (ibid.)

この分析によれば、「自分」の束縛解釈のために *e* の位置に大主語「子供」を再構成することができる。(36) についても同様に大主語を関係化すれば (39) となる。

(39) [e_i [pro_i 可愛がっていた 犬] が 死んでしまった] 子供

表面上、(39) は (35) と異ならないように見えるが、(39) では二重関係化が起こっていないため、(12) は破られていない。(35) が二重関係化の例外に見えたのは、誤った分析から生じた幻想に過ぎないということになる。では、非文法的な (33) についてはどうか。対応すると思われる大主語文は (40) となるが、それは非文である。

(40) *その本_iが [[その学者が e_i pro_i 送った] 書店_j] が 焼けた。 (ibid.)

即ち、(33) は (40) の構造から派生すると考えることはできず、その場合、(12) に抵触した派生を取ることに become と思われる。Whitman の議論から、本論文の提案する (33) の説明は支持を受け、日本語関係構造の等位接続分析が更に補強されると考える。もちろん空代名詞や名詞句省略は (33) の非文法性とは相容れない。

ついでながら、日本語では関係構造中に元位置の WH が現れ、その作用域が関係構造を飛び越えることができるという、2 節の (14) で見た英語の複名詞句制約の違反とは対照的な事実があるが、(12) とはどのような関係を持つのか。(41) を例に取れば、元位置の WH 「何」の作用域が主節に及び、WH 疑問文の解釈になる。

(41) 君は [[e 何を買った] 人] を探しているの。

かつて Lasnik and Saito (1992) 等で LF 移動による分析が試みられたが、既に触れたように現行の枠組みでは LF 移動を仮定することができない。しかし、日本語では (顕在的に) WH 移動が起こらないため、(41) の関係節内には WH 移動のコピーが存在しない。とすると、(12) に抵触するような状況もそもそも起こり得ない。なお、元位置の WH の作用域解釈に関しては Chomsky (1995) を含めこれまで多くの文献で指摘されているように、Heim (1982) の意味での無差別束縛が一つの可能性として考えられる。適用はインタフェイス以降となろう¹³。

5. 日英語の主名詞内在関係構造

5.1. 日本語の主名詞内在関係構造

前節では日本語の主名詞外在関係構造についてその統語的派生と外在化について論じたが、関係構造が線形化される際、句の主要部に付与された〔末尾〕と、形態的な接辞付加に掛かる隣接条件が重要な役割を演じるとした。主名詞外在関係構造では、(32)のような配列を基に外在化が行われる。

(32) [_{NP} [_{DP} [[_{DP} [IP 学者が t_{DP} 送った] C_{D[末尾]}] Conj]] [_{DP} 本]] n_[末尾]]

下線で示されているように、〔末尾〕を付与された *n* の前に隣接して主名詞が現れており、接辞付加が可能となっている。

(32) において、*n* はそれ自身の音形を持たない。しかし、日本語の *n* に相当する要素には「-さ」や「-み」のように音形を持つものがある。

(42) a. 甘-さ

b. 甘-み

興味深いことに、「-さ／み」も同格の要素（この場合には語根）が2つ並べられた後に生起することがある。(43)-(44) はインターネット上で見つかった例である。

(43) a. 甘・じよっぱ-さ

b. しょっぱ・辛-さ

c. 重・だる-さ

d. 痛・気持ち良-さ

e. キモ・かわい-さ

(44) あま・じよっぱ-み

(43)-(44) では何れも「-さ／み」が末尾に一度しか現れないことから、*n* が1つしか生起していないことを示唆する。2つの語根の結び付きは強く、意味的には複合された1つの種類のもの（性質、状態）を指す。(43)-(44) と (45)-(46) を比較してみれば、後者では2つの別種のものが並列されていると解釈でき、前者とは意味が異なることがわかる。

(45) 甘-さ (,) しょっぱ-さ

(46) あま-み (,) しょっぱ-み

(45)-(46) では「-さ／み」が二度現れており、*n* が2つ生起していると思われる。(32)でも関係節と主名詞句の表す属性が言わば複合された1つの種類のものを指すわけであるが、(43)-(44) の各例が等位構造を含んで全体として1つの *nP* を構成しているとする、(32) と共通した構造を取っている可能性が考えられる。ただ、(32) では *n* に音形がない。そのような関係構造においても *n* に音形を持つ要素が現れることを以下、述べたい。

(32) では、(28) に示した派生のとおり、主名詞句が関係節内にコピーを残して Conj

の投射と併合し、原則に従って元の位置に残されたコピーを削除している。関係節内のコピーが削除されるのに対し併合先のコピーの内容は保持されることになるが、それにより語根(+D)と *n* の形態的な結合を外在化することができる。しかし、線形順序において関係節内のコピーが併合先の主名詞句に先行することから、削除の仕方としては逆行的となる。仮に削除は線形順序に従って順行的に行うことが優先されるとするならば、(32)は(47)のような削除を受けることになる。

(47) [_{nP} [_{DP} [[_{DP} [_{IP} 学者が 本 を 送った] C_{DI} [_{末尾}] Conj] ~~[_{DP} 本]~~] *n* [_{末尾}]

(47) では関係節内のコピーの内容が保たれ、併合先で削除が起こっている。削除された主名詞句には隣接する *n* と結合すべき語根(+D)が含まれているが、削除により音声内容を失うため、*n* との結合が実行可能であったとしてもそれを外在化できなくなる。最後の手段として *n* に「の」を形態的に挿入すれば、(48)の主名詞内在関係構造が得られる。

(48) [[学者が 本 を 送った] の] (がまだ届かない。)

ただし、順行削除が逆行削除に優先されるとした場合、主名詞外在関係構造の派生について、主名詞内在関係構造の *n* とは異なった逆行削除を引き起こす性質を持つ *n* を仮定するか、さもなければ、別の派生方法を考えなければならない。

(47) のような削除の仕方は順行削除を遵守するためとし、「の」の挿入を *n* が何らかの語根(+D)と結合していることを示すためとする可能性は仮説としてはあり得よう。しかし、*n* と語根(+D)との結合が Embick and Marantz (2008: 6) が述べているように語根側の要求によるものだとすると、むしろ、次のように述べ直すべきかもしれない。「の」は統語派生において初めから *nP* 主要部として関係構造に導入される（「の」が名詞句主要部を占める名詞化辞とする分析は三原 (1994) 等にも見られる）。「の」は、その形態的特性として、語根に直接接辞付加しない。これは「-さ/み」と異なる点である。

(49) a. 食べる の (cf. *甘い-さ / *甘い-み)

b. *食べ-の (cf. 甘-さ / 甘-み)

そのため、主名詞句の語根(+D)が「の」に隣接して現れる必要はあるが、「の」は語根の要求を充たさないと考える。形態的要求が充たされない語根を救うやはり最後の手段として、削除によりその要求を消す。列形成が適用される際、併合先の主名詞句に削除が施され、その代わりに関係節内のコピーの内容が保持され具現される。(47) で関係節内のコピーは、厳密には、動詞「送った」の目的語 *nP* 内の補部であり（注2参照）、語根の要求はそこで充たされる。

主名詞内在の構造が主名詞外在の構造と同様に等位接続分析を受けるとすると、やはり上で見たように(12)が問題となる可能性がある。(12)は等位構造制約と複名詞句制約を列形成適用のための条件として捉え直したものと言え、それが充たされなければ当該構

造内の線形順序が確定されず、外在化が不可能となる。等位接続分析を取ることから主名詞内在関係構造でも二重関係化が不可能であると予測されるが、実際にそれを裏付ける事実が Watanabe (1992) 以来知られている。

(50) *[[ジョンが [[素晴らしい論文を書いた] 人] を褒めていた] の] が出版された。 (ibid.: 261)

(50) では、内側の関係構造（下線部分）の中に現れる主名詞句「素晴らしい論文」がそこから取り出されて外側に別の関係構造を作る二重関係化が意図されているわけであるが（それ以外の解釈は、可能であったとしても、ここでの論点から外れるので注意された）、前節で見た (33) と同様、(50) も非文となる。本論文の提案が正しければ、この非文法性にはやはり (12) が関与していると思ふことができる。

主名詞内在関係構造の分析についてはこれまで、何らかの移動を仮定する陣営と仮定しない陣営の間で議論が続けられてきた。紙幅の制限により、ここではそれらの詳細に立ち入ることはしないが、Grosu and Hoshi (2019)、Kitagawa (2019)、およびそれぞれに引用されている文献等を参照されたい。一般に、主名詞内在の構造は主名詞外在の構造に比べ、話者による許容度の差が大きいと言われるが、これは前者が主名詞句を明示しないことに特に起因しよう。本節では主名詞句が明示されない（削除される）ことの可能な理由を述べた。

5.2. 英語の主名詞内在関係構造？

主名詞内在関係構造が OV 言語にのみ生ずるとする Gorbet (1976, 1977) と Keenan (1978) に言及しながら、Cole (1987) はむしろそれが名詞句内における左枝分かれ、つまり、主要部末尾ということから導き出されるとした。日本語は正に主要部末尾の言語であり、主名詞内在関係構造を持つ。主要部先頭の言語である英語には主名詞内在関係構造がないと予測されるが、それに相当する構造は全く存在しないのだろうか。

上で主名詞内在関係構造の派生の仕方として2通りの可能性を示した。1つは、関係節の内と外に生ずる主名詞句のコピーのうち後行しているものを順行削除し、語根(+D)と n の結合を外在化するため n に形態的に「の」を挿入する。これを仮説 A としよう。もう1つは、基底生成された nP 主要部「の」の形態的特性により、関係節の内と外に生ずる主名詞句のコピーのうち「の」に隣接する関係節外のを削除する。これを仮説 B としよう。まず、仮説 A により英語の関係構造を考えてみる。3節で見たように、英語の関係節は主名詞句に後続する必要がある。そのため、順行削除を行えば必然的に関係節内のコピーが削除され常に主名詞外在の構造となる。よって英語には主名詞内在の構造が生じないことが導出される。しかし、既に触れてきたように、仮説 A には全く問題がな

いわけではない。

次に仮説 B についてであるが、日本語の「の」のように音形を持つ *n* は現れないものの、(51) に挙げるような文が仮説 B から導かれる主名詞内在関係構造を含んでいる可能性を疑わせる。

- (51) a. I saw the man cross the street.
 b. There's a woman wants to see you.

もし、これらが当該の構造を含むとすれば、(52a, b) のような（簡略化した）等位構造を持つことになる。なお、2 節で前提としたように、DP は弱限定詞を含み、強限定詞を含まない。また、音形を持たない *nP* 主要部が日本語の「の」のように語根の要求を充たさないもの (ϕ_n) になっているとすることから、主名詞句 DP のコピーのうち関係節外の *n* に隣接するものが削除を受ける。

- (52) a. [_{*nP*} the ϕ_n [_{~~DP~~} ~~man~~] Conj [man cross the street]]
 b. [_{*nP*} ϕ_n [_{~~DP~~} ~~a woman~~] Conj [a woman wants to see you]]

(51a) の知覚動詞文についてここでは考えよう。(51a) は対応する受動文が (53) であるとされる。

- (53) The man was seen to cross the street.

しかし、直接の知覚対象が (51a) では the man であるのに対し、(53) では the man cross the street という事象であるという点で両者には意味的な違いがある。また、(51a) では不定詞の *to* が現れないのに対し、(53) では現れることから、構造的にも違いがある可能性がある。(53) と対照的に、*to* を含まない (54) が非文となるのはなぜだろうか。

- (54) *The man was seen cross the street.

to を含まないのは (51a) と同様であり、(54) は (51a) と同じ構造、つまり、(52a) のような関係構造を取っているとしてみよう。受動文の主語となる the man はこの構造から抽出されて IP と併合されると考えられるが、(52a) において the man はそれだけで単一の統辞体を成していない。したがって、the man は併合の対象とならず、(54) は派生されない。また、*nP* 主要部 ϕ_n がその特性として INFL とは一致を起こさないとすれば、(54) の非文法性はもとより、主名詞内在関係構造を成す *nP* 全体が受動文の主語にならないことも説明される。

更に、知覚動詞文では (55) のように（見掛け上の）裸不定詞補文の主語から抽出が可能であるという事実がある。

- (55) Which actor did you see [[a friend of *t*] talk to Mary]?

(Declerck (1983: 115))

このことは、主語からの抽出が英語では一般に許されないことと矛盾する。

(56) *Who did you believe [[pictures of *t*] to be on sale]?

(55) において裸不定詞補文とされるものが、実際には (52a) に示したような主名詞句と関係節から成る等位構造を含んだ主名詞内在関係構造であるとするならば、抽出された WH のコピー (t_{WH}) が (57) のように2つの等位項それぞれに生じていると見做すことができる (関係節側の t_{WH} については Chomsky (2021) の提案するコピー形成 (FormCopy) を仮定する)。

(57) WH ... [_{NP} ϕ の [[_{DP} a friend of t_{WH}] Conj [a friend of t_{WH} talk to Mary]]]

(12) から、等位構造からの抽出は全域的適用によることが義務付けられるが、(57) はそれに従っていることになり、列形成の結果、(55) の外在化が可能となる。

以上の説明が妥当であるとすれば、仮説 A でなく仮説 B が選ばれることになる。しかし、知覚動詞文について、例えば、(見掛け上の) 裸不定詞補文の主語としては固有名詞や代名詞も可能であるのに対し、制限的關係構造の主名詞句としてはそうでないのはなぜかといった問題がある。また、主名詞内在関係構造が日本語では観察される環境において、英語では観察されないのはなぜかというより根本的な問題もあり、検討の余地は残される。

6. 結論

日英語の關係構造の統語的派生と外在化について現行のミニマリスト・プログラムの枠組みにより考察を行った。赤羽 (2021) の等位接続分析に基づき、日本語の主名詞外在關係構造と主名詞内在關係構造の基本的特徴が等位構造によって捉えられることを示した。何れの關係構造の外在化にも Chomsky (2021) が提案する列形成を用いた説明を試みた。日本語と英語における關係構造の相違については、接辞付加に掛かる隣接条件と主要部に与えられる [末尾] 素性が重要な役割を演じているとした。また、日本語の主名詞内在關係構造の分析を關係があると思われる英語の構造にも適用し、關係構造の等位接続分析の可能性を探った。言うまでもなく、ここに示した分析は当該構造について完全な説明を与えるものではなく、細部については更なる吟味が必要である。特に主名詞内在關係構造についての包括的な理解には、Kuroda (1975-76) 以来の意味論・語用論的な視点も組み合わせて考える必要があるだろう。それについての議論は別稿に譲ることにする。

【注】

1 赤羽 (2021) では every のような強限定詞が *nP* 主要部を占めるとした。これに対し、Chomsky (2020: 51) は、強限定詞の一種である指示詞 *that* が *nP* に付加された要素であるとしている。また、同じく強限定詞である定冠詞についても *nP* 中に含ま

れる素性であって、統語的に併合された要素ではないという可能性に言及している。何れの強限定詞も *nP* 主要部の要素とは見做されていないことを踏まえ、本論文でも強限定詞を *nP* 主要部の要素として扱わない。

- 2 (i) に示すように、(9) の [_{DP} girl] は動詞 saw の目的語位置を占める *nP* 内で *n* の補部として併合されたものと考えている。

(i) ... Mary saw [_{nP} *n* [_{DP} girl]]

以下の議論でもこのような仮定をするが、4 節以降の日本語の関係構造にも同様の仮定をする。

- 3 赤羽 (2021) では、主名詞句となる DP そのものの内部併合に加え、語彙的内容を持たない空の関係演算子 *Op* の内部併合も (i) のような例の説明のために選択肢として考えられている。

(i) Which is the picture of John_i that he_i likes? (Sauerland (2003: 210))

(i) で主名詞句 (picture of John) が関係節の目的語位置に再構成された場合、John が he に束縛され束縛条件 C の違反が生ずると予測されるが、実際には非文にならないとされる。これを語彙的内容を持たない *Op* に帰すのであるが、再構成の随意性に帰すことも考え得る。

- 4 関係節主要部として who は外部併合 (= 基底生成) され、関係節外に上昇した主名詞句と [人間] 素性を Conj を介して照合すると考えるが、主名詞句が関係節の極辺に残しているコピーを転送適用後、何らかの理由により who として具現するといった可能性も否定しない。

- 5 Hoshi (2004) は単純照応形「自分」を複合照応形「自分自身」に置き換えた場合、問題となる束縛解釈は完全に許容されるとしている。

(i) [ジョン_iが *e* タイプした] 自分自身_i の論文 (ibid.: 121)

また、Ishii (1991) は照応形を「彼自身」にした場合、束縛解釈が可能になるとしている。

(ii) メアリは [[ジョン_iが *e* タイプした] 彼自身_i の論文] を持ってきた。

(ibid.: 29)

- 6 (i)-(ii) の例のように、現代語の動詞連体形は形態格を伴うことがあり、この点においては名詞的要素と言える。

(i) a. [やってみる]-が いい。

b. 太郎は [破産する]-に 至った。 (Horie (1993: 310))

(ii) [言う]-を 俟たない。

- 7 柴谷 (2021) は、形式的に合一化していた連体形と終止形について形式的な区別を復

活させている方言があることにも、実例は挙げていないが、言及している。恐らく八丈方言等かと思われる（柴谷（2022）参照）。

- 8 Chomsky（2021）は、(i) のような例において同じ時制が2つの等位項に共有されていないことを指摘する（相や法についても同様のことが当てはまるとする）。

(i) John arrives every day at noon and met Bill yesterday (ibid.: 34)

このため、Chomsky は時制を動詞化辞 v の特性であるとした上で、従来の T に替えて I(NFL) を採用している。I は ϕ 素性で構成される。本論文でも T(P) でなく I(P) を仮定する。

- 9 Chomsky（2021: 7）はインタフェイスのレベルも仮定する必要がないと述べている。
10 C が D 素性と [Q] 素性の両方を持つことも想定している。「か」は、(i) の Fukui（1986: 218）の例に見るように、形態格を伴う場合がある。

(i) a. [[ジョンが 何を 買った] か]-が 問題だ。

b. ジョンは [[ビルが 何を 買う] か]-を 知りたがっている。

Fukui はこのような事実から「か」は名詞であると結論付けているが、本論文では形態格を伴うのは D を包含する音形を持った要素（典型的には nP ）であると考え。他方、「と」は (ii) に示すように形態格を伴わない。

(ii) a. *[[ジョンが メアリを 殴った] と]-が 驚きだ。

b. *ジョンは [[自分が 昔 一生懸命 勉強しなかった] と]-を 後悔している。

(ibid.: 221)

Fukui は「と」を後置詞としているが、本論文では D 素性も [Q] 素性も持たない C と考える。

- 11 Greeberg（1963）の提案した普遍性で後置詞に関するものには他に以下のようなものがある。

(i) 普遍性 2

前置詞を持つ言語ではほとんど常に属格が支配名詞に後続するのに対し、後置詞を持つ言語ではほとんど常に属格が支配名詞に先行する。 (ibid.: 62)

(ii) 普遍性 9

偶然を圧倒的に上回る頻度で、疑問の不変化詞・接辞が文全体に対する位置を指定されるとき、それが文頭であれば前置詞の言語であり、文末であれば後置詞の言語である。 (ibid.: 64)

(iii) 普遍性 27

専ら接尾辞を用いる言語であれば、それは後置詞の言語である。専ら接頭辞を用いる言語であれば、前置詞の言語である。 (ibid.: 73)

普遍性2の属格は英語で前置詞“of”、日本語で後置詞「の」(何れも *p*) によって表され、また、普遍性9の疑問の不変化詞・接辞、つまり、補文化辞Cに具現する要素は英語で“if / whether”、日本語で「か／かどうか」となる。どちらの普遍性も主要部に対する [末尾] 付与に関する媒介変数により説明ができる。普遍性27については本論文の議論だけでは捉えきれないと思われる。

- 12 主要部先頭 (VO) で且つ関係節が主名詞句に先行する中国語のような言語についてはこの説明だけでは十分でなく、更なる議論が必要となる。中国語を主要部末尾 (OV) の言語と考える可能性もあるが、この問題は本論文の射程を越えるため、ここでは検討しない。
- 13 ただし、元位置の WH でも「なぜ」のような副詞については統語派生の段階で [Q] 素性を持った CP 主要部から局所的な一致によって認可されるといったことを仮定する必要はあろう。

(i) *君は [[*e* なぜ その本を買った] 人] を探しているの。

(Lasnik and Saito (1992: 36))

(i) は関係節内の理由を尋ねる疑問文を意図しているが、関係節内で「なぜ」に対して局所的な一致が行える [Q] 素性を持った C が存在していないため、非文となる。

参考文献

- 赤羽仁志 (2021) 「英語の制限的關係構造について」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』第12巻第2号: 21-42.
- Alexiadou, Artemis, Paul Law, André Meinunger and Chris Wilder (2000) Introduction. In: Artemis Alexiadou, Paul Law, André Meinunger and Chris Wilder (eds.) *The syntax of relative clauses*, 1-51. Amsterdam: John Benjamins.
- Baker, Mark (2003) “Verbal adjectives” as adjectives without phi-features. In: Yukio Otsu (ed.) *The proceedings of the fourth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 1-22. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Chomsky, Noam (1995) Categories and transformations. In: *The Minimalist Program*, 219-394. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces + recursion = language.?: Chomsky’s minimalism and the view from syntax-semantics*, 1-30. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2013) Problems of projection. *Lingua* 130: 33-49.

- Chomsky, Noam (2020) The UCLA lectures. Unpublished manuscript. <https://ling.auf.net/lingbuzz/005485>
- Chomsky, Noam (2021) Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. *Gengo Kenkyu* 160: 1-41.
- Chomsky, Noam, Ángel Gallego and Dennis Ott (2019) Generative grammar and the faculty of language: Insights, questions, and challenges. *Catalan Journal of Linguistics* Special Issue: 229-261.
- Cole, Peter (1987) The structure of internally headed relative clauses. *Natural Language and Linguistic Theory* 5: 277-302.
- Declerck, Renaat (1983) The structure of infinitival perception verb complements in a transformational grammar. In: Liliane Tasmowski and Dominique Willems (eds.) *Problems in syntax*, 105-128. New York: Plenum Press.
- Embick, David and Alec Marantz (2008) Architecture and blocking. *Linguistic Inquiry* 39: 1-53.
- Embick, David and Rolf Noyer (2001) Movement operations after syntax. *Linguistic Inquiry* 32: 555-595.
- Fukui, Naoki (1986) A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT.
- Gorbet, Larry (1976) *A grammar of Diequeño nominals*. New York: Garland Publishing.
- Gorbet, Larry (1977) Headless relatives in the Southwest: Are they related? *Proceedings of the third annual meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 270-278. Berkeley: Berkeley Linguistic Society.
- Greenberg, Joseph (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In: Joseph Greenberg (ed.) *Universals of language*, 58-90. London: MIT Press.
- Grosu, Alexander and Koji Hoshi (2019) Japanese internally-headed and doubly-headed relative constructions, and a comparison of two approaches. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 4(1): 128. 1-23. DOI: <https://doi.org/10.5334/gjgl.1035>
- 郡司隆男 (2002) 『単語と文の構造』, 現代言語学入門第3巻. 東京: 岩波書店.
- Hasegawa, Nobuko (1988) Remarks on 'zero pronominals': In defense of Hasegawa (1984/85). In: Wako Tawa and Mineharu Nakayama (eds.) *Proceedings of Japanese syntax workshop: Issues on empty categories*, 50-76. New London: Connecticut College.

- Heim, Irene (1982) The semantics of definite and indefinite noun phrases. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Hiraiwa, Ken (2001) Nominative-genitive conversion. In: Elena Guerzoni and Ora Matushanky (eds.) *A few from Building E39: Papers in syntax, semantics and their interface*, 66-125. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.
- Hoji, Hajime (1985) Logical form constraints and configurational structures in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington, Seattle.
- Horie, Kaoru (1993) From zero to overt nominalizer *no*: A syntactic change in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 3: 305-321.
- Hoshi, Koji (2004) Remarks on N-final relativization in Japanese. *English Language and Literature* 44: 113-147. Keio University.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』上. 東京: 大修館書店.
- Ishii, Yasuo (1991) Operators and empty categories in Japanese. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Jackendoff, Ray (1977) *\bar{X} syntax: A study of phrase structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kayne, Richard (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Keenan, Edward (1978) Relative clauses in the languages of the world. UCLA.
- Kitagawa, Chisato (2019) The pro-head analysis of the Japanese internally-headed relative clause. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 4(1): 62. 1-31. DOI: <https://doi.org/10.5334/gjgl.857>
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. (1975-76) Pivot-independent relativization in Japanese II. *Papers in Japanese Linguistics* 4: 85-96.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α : Conditions on its application and output*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造 - 生成文法理論とその応用 -』. 東京: 松柏社.
- Milsark, Gary (1977) Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3: 1-29.
- Miyagawa, Shigeru (1993) LF Case-checking and minimal link condition. In: Colin Phillips (ed.) *Papers on case and agreement II*, 213-254. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.

- Murasugi, Keiko (1991) Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability, and acquisition. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Murasugi, Keiko (2000) An antisymmetry analysis of Japanese relative clauses. In: Artemis Alexiadou, Paul Law, Andre Meinunger and Chris Wilder (eds.) *The syntax of relative clauses*, 231-264. Amsterdam: John Benjamins.
- Ross, John (1967) Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.
- Sakai, Hiromu (1994) Complex NP constraint and case-conversions in Japanese. In: Masaru Nakamura (ed.) *Current topics in English and Japanese*, 179-203. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Sauerland, Uli (2000) Two structures for English restrictive relative clauses. *Proceedings of the Nanzan GLOW*, 351-366. Nagoya: Nanzan University.
- Sauerland, Uli (2003) Unpronounced heads in relative clauses. In: Kerstin Schwabe and Susanne Winkler (eds.) *The interfaces: Deriving and interpreting omitted structures*, 205-226. Amsterdam: John Benjamins.
- Schachter, Paul (1973) Focus and relativization. *Language* 49: 19-46.
- Shibatani, Masayoshi (1978) Mikami Akira and the notion of 'subject' in Japanese grammar. In: John Hinds and Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese syntax and semantics*, 52-67. Tokyo: Kaitakusha.
- 柴谷方良 (2021) 「連体修飾の文法－類別詞と文法性を中心に－」 鄭聖汝・柴谷方良 (編) 『体言化理論と言語分析』: 459-555. 大阪: 大阪大学出版会.
- 柴谷方良 (2022) 「言語の分析その1 (後編)」, 言語学レクチャーシリーズ (試験版) Vol.15. 国立国語研究所. <https://www.youtube.com/watch?v=1KgioqT5OJ4>
- Watanabe, Akira (1992) Subjacency and S-structure movement of *wh*-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1, 255-291.
- Whitman, John (2013) The prehead relative clause problem. In: Umut Özge (ed.) *Proceedings of the eighth Workshop on Altaic Formal Linguistics*, 361-380. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.